

縫製業でがんばっています

中村ソーイング株式会社

職場
ルポ

WORKSHOP
REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



中村ソーイング株式会社

〒787-0011 高知県中村市右山元町1-10-10
TEL 0880-34-2634 FAX 0880-34-5192



中村ソーイング本社工場

四万十川近くに 企業誘致で創業

日本最後の清流と言われる四万十川。高知県中村市は、その大河がゆつたりと太平洋に注ぐ河口に位置している。中村駅から車で数分のところに今回の取材先、「中村ソーイング株式会社」がある。

製造業はほとんど海外移転し、縫製と聞くと、中国、インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム……の国々が頭に浮かぶ。かつて、縫製業は女性の障害者が多く働く職場の一つだったが、職場ルポには久しぶりの登場だ。

中村ソーイングは、市の企業誘致に応え、三重県の新興産業の子会社、新興シャツの営業部長が社長となって、一九七七年に創業された。現社長の岡崎福夫さんは地元中村市の出身、企業が誘致されることになり、三重まで勉強に行った。

「縫製工場の主力は女性です。当時、女性の働く場は少なかったです」

ら、企業を誘致したのだと思います」

創業時は、ワイシャツと、ガソリンスタンドで働く人たちの制服などが中心だった。その後、一般のワイシャツは海外で製造されるようになり、今日では電鉄会社や中学・高校の制服のワイシャツ、ブラウスが中心となっている。

「ふつつのワイシャツが海外に出て行くようになって一五年から二〇年になると思いますが、それ以降、国内に残っているものは小さなロットになりました。ロットの大きい電鉄会社のシャツが残るのは不思議な気もしますが、特注や別注が多いためかもしれません。中学や高校のワイシャツやブラウスはほとんどに校章などの刺繍が入りますし、少子化で一つの学校の単位が小さくなっていますので、海外には出しにくくなっているのだと思います」

中国や東南アジアの国々との競争はシ



岡崎福夫中村ソーイング(株)社長

ピアだそうだ。

「経営的には非常に苦しいです。地元で結婚してうちで働いているフィリピン人はいますが、中国人を斡旋業者から雇い入れるということはしたくないですね。地元の人でがんばりたいと思っています」

採用は、体力と 根気強さを見る

現在、従業員は二二五名。そのうち障害者が二二名いる。障害者は会社の創業時から働いており、当時はろう学校の卒業生が主だった。

「初めから三、四人は働いていたと思います。障害があるからと区別するのは好きではないので、同じように注意をして、同じように働いてもらっています。聴覚にハンディのある人とは筆談ですが、最初のころは家庭や学校の中だけで外へ出て行くことが少なかったためか、自分の思っていることは曲げず、みんな頑固でした。二人で作業していて、一人がミスしても自分の責任ではないという傾向が強かったのですが、職場に慣れてくると、二人で仕事をしているのだという意識が出てきた気がします」

今日、聴覚障害者は二〇二二年度に優秀勤労障害者として厚生労働大臣表彰を受けた土居美矢子さん一人になった。そ

職場 ルポ

(右) 優秀勤労障害者として
厚生労働大臣表彰を受けた
土居美矢子さん
(左) 勤続17年のベテラン
金崎文代さん



の代わり、創業後まもなくして働き始めた知的障害者が増え、本社工場に一〇名、大用工場に一名いる。

「職場実習を経て採用をしています。採用に当たっては体力が大事だと思いますが、いまの若者と同じで、頑強な体を持っている人はいなくなりましたね。それと根気強さも必要です」

社長は細かいことは現場に任せ、現場からの報告を聞く。

「私はあまり細かいことは言いません。縫製はそれぞれの人たちが一つのポジションを担当する地道な仕事です。縫いがちよつと悪ければ、まわりに迷惑をかけ、どこかにひずみが出てきます。最初に確実にできるように教えますと、確実に作業をしてくれます。ボタン付けが機械並みに早い人もいました」

工場に入ると、有線放送の音楽が流れている。ユニフォームと一口に言っても、薄緑、白、ピンク、白地に赤の縦じま……と色もデザインもさまざま。銀行、パチンコ店、学校の制服のワイシャツやブラウスなど、小

“四桁数字のコンピューター” 金沢克典さんの仕事は、裁断



ロット単位で作業が進んでいる。

金崎文代さんは定年を迎え、再雇用された大ベテラン。後ろ身頃と前身頃を合わせて肩合わせの縫いを次々とこなしていく。勤続二〇年の表彰を受けた加用喜英さん、「四桁の数字ならことごとく覚えていくコンピュータ」という金沢克典さん。「実習のときからミシンができると思いましたが、とても器用で努力家で



社長との約束を守って仕事に励む森美幸さん

す」と社長が認める大浜真理さんは入社して一〇年。ミシンを巧みに使い、袖口を縫っていた。

通勤寮と信頼関係を築いて

職場定着がむずかしそうなケースは、高知障害者職業センターが支援をする。ジョブコーチの宮川貢さんは高知市から片道二時間半かけて、毎日のように通ってきた。

「精神的に不安定な方のケースでしたので、昼休みに話を聞き、グループホームの世話人さんと話をしたりしました。いまは休職中ですが、治って復帰してもらいたいと思っています」

中村市には、高知県知的障害者育成会（理事長 曾我高次）が運営する中村通勤寮（寮長 成子聡）がある。その中に障害者就業・生活支援センター「ラポール」があり、高知障害者職業センターの協力



畠中繁昌さんのプレス作業を見守る高知障害者職業センターの宮川貢ジョブコーチ（写真左）と「ラポール」の伊賀原雅文就業支援ワーカー（写真右）

WORKSHOP REPORT



(上) エリ芯づくりの畑山京子さん

(左) 器用で努力家の大浜真理さん

機関型ジョブコーチとして活動している。障害者職業カウンセラーの竹本嗣康さんはその存在は大きいという。
「急に何か起こったときに対応していただいています。中村ソーイングの場合、支援する人の一カ月の計画を立てて、週二回三回と、宮川と就業支援ワーカーの伊賀原さんに行っていたいていま

す。お世話になってますね」

一九八三年に設立された中村通勤寮は、中村ソーイングとは長い付き合いだ。取材の日も、「ラポール」の生活支援ワーカーの上岡敬さんと、就業支援ワーカーの伊賀原雅文さんが同席してくれた。上岡さんは中村ソーイングと一七、八年かかわってきた。

「職場の方からの相談はよくありますが、いったん雇い入れたら面倒を見るといのが社長の考えで、細かいことはおつしやいません。これまでに、ちよつと無理かなと思う方でも、社長にお願いすると引き受けてくださったというケースが何例もありました。仕事面は会社にお任せして、生活面での心配事はグループホームと通勤寮で対応していますが、就職先としてとても大事なところですよ」

ほとんどの知的障害者がグループホームから通っている。双方のコミュニケーションがよくとれているので、グループホームの世話人から社長に頼みごとがくることもある。たとえば、ラーメンやスナックなどが大好きで太りすぎ、医者から肝臓が悪化しているので体重を落とすようにと警告されたのに世話人の忠告を聞かないという人の場合は、社長の出番となる。

「このまま行くと四〇歳ぐらいで死ぬぞと神妙に話したら、夜の間食を止めたみたいですよ。約束を破ったら、五〇〇



プレスを担当する森国朝子さん

円ずつ持つてこい』と言って、本人のために貯金をしておこうと思ったのですが、八〇キロだった体重が四キロやせて、持つてこないところを見ると、約束は守っているようですね。一五キロはやせないといけないので、これからも見守っていきたいと思います」

中村ソーイングとラポールは車で五、六分の距離だ。地域の生活支援がしっかりしていれば、企業も安心して雇用がで

高知障害者職業センター

〒781-5102 高知県高知市大津甲770-3
TEL 088-866-2111 FAX 088-866-0676



岡崎社長と懇談する高知障害者職業センターの竹本嗣康障害者職業カウンセラー（写真中）とラポールの上岡敬生活支援ワーカー（写真左）

きる。
「身近に上岡さんがいますので、相談に乗ってもらえます」と社長。
「近くですし、長年のかかわりがありますから、なあなあにはなりたくないと思っただけです。連絡会や会合を持つと、高知はお酒が好きですから、懇親会がついてきます。でも、飲みながらも、まじめに議論しているんです」と上岡さん。

本音で語り合えば、障害者を雇用している悩みはあるはず。事業主と就労支援をする人たちがお酒を酌み交わし、忌憚なく意見を交わせる人間関係が築かれているから、就職がむずかしそうだと思う人も、働き続けることができるのだらう。

工場を譲り、福祉工場に

実は四年ほど前までは、中村ソーイングには二七、八名の障害者が働いていた。しかし経営的に厳しく、六工場のうちの具同工場を高知県知的障害者育成会に譲り、福祉工場「中村」を設立。同工場で働いていた障害者は引き続き「中村」で働くことになった。仕事は中村ソーイングのときと変わりはなく、仕上げ工程を担当している。

「設備も建物も全部譲りましたが、中村ソーイングの仕事が一〇〇パーセントで、最後の仕上げ工程のアイロンがけと梱包を行っています」

福祉工場「中村」は、中村ソーイングから車で数分の四万十川を渡ったところにある。中村の施設長は山沖美枝



中村ソーイングの仕上げ工程と梱包を行っている



子さん。中村ソーイングに勤めていたときから障害者とかかわりを持ち、この責任者になって大学の通信教育で社会福祉について学び、縫製のことでも知的障

WORKSHOP REPORT

福祉工場「中村」の山沖美枝子施設長



害者のことも詳しい。「中村ソーイングから受注をいただいで、仕上げの工程の仕事をしています。いままでは雇ってもらっていたけれど、いまは自分たちが主役、自分たちの工場という意識がみんなに高くなって、自分たちががんばらなければという思いが出てきました。製品も厳しくチェックしてくれます。見ていただいたらわかると思いますが、はりきって働いていますね」

福祉工場の従業員二五名のうち、障害者は一七名。知的障害のほかに、身体障害と視覚障害の人もいる。工場は明るく、ここでも有線放送の音楽が流れている。「仕事のメリハリがつかまずし、励みにもなるので、従業員が聞きたい音楽をかけています」

襟、袖などのアイロンかけの手際がよく、作業の様子からは障害があるかどうかはわからない。視覚障害者はワイシャツ

福祉工場「中村」



ツのボタンかけが得意。一つ一つのボタンは見えなくても、手の感触で作業をしていく。自分たちの自治会もある。「シャツを売って現金をいただけるという実感を得るために、市役所や町役場などに販売にも出かけています。最初は恥ずかしそうでしたが、回を重ねることに大きな声が出るようになりました。地域の人たちと交わって、お金をいただくという喜びを感じてほしいと思います。中村ソーイングのとき以上に力を合わせてがんばっていますから、ずっと黒字で

す。企業としての運営ですから、給料もほぼ変わりません」

たとえ苦しくても 障害者の解雇は考えない

長い人は勤続二〇年以上。知的障害者は一般の人より加齢が早いと言われる。

「老化をカバーすることを考えていかなければならないと思います。障害者雇用については、退職者がいませんので新たな採用はなかなかできませんが、いま雇用している人たちにできるだけ長く勤めてもらうことと、その後継者たちも育てていかないといけないと思っています」

会社案内では、「確かなテクニク」の大切さをうたっている。

「会社については経営的に非常に厳しい状態が続いています。余剰の人員がいまでするので、ウエイトを落とさなければいけないところもありますが、障害者はその中には含まずに考えています」

「みんな海外に出て行っている。おかしいよね」と社長の岡崎さん。太古の昔から豊かな生命を育んできた四万十川。会社近くの大河を眺めていると、日本国内でがんばっている製造業の心意気に、これからもがんばり続けてほしいと願わずにはいられない。